

定例研究会要旨

日時：平成 27 (2015) 年 11 月 25 日 18:00~20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

「ドイツ語の Passiv は「受身」ではない – 受動文の日独対照」

発表者：成田 節 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授 / ドイツ語学)

日本語の受動文は益岡(2000)などの先行研究によれば「受動文の主体が他者から事象を通して何らかの影響を受けるという型」の受影受動文と「動作主を背景化することを動機とする」降格受動文に大きく分けることができる。一方ドイツ語の受動文は文法書などの記述に基づいて「動作主ではなく、被動者(あるいは行為そのもの)に目を向ける」表現だとまとめることができる。これは日本語の降格受動文と同じタイプの表現だと考えられるが、そもそも日本語の降格受動文が近代以降外国語の影響により発達した「非固有の受身」とされる(金水 1991, 1993)ことを考え合わせれば、これは当然だと言えよう。さてそれではドイツ語の受動文には、日本語の受影受動文に相当するタイプはないだろうか？

この発表では、日本語とドイツ語の受動文についての記述を概観し、特に「受影」、別の言い方をすれば「被影響」を「主語者が他者の行為や変化から何らかの影響を受けたと認識すること」すなわち、「主語者が感じる被影響感」(川村 2012)と捉えた上で、この問題を考察した。

結論としては、日本語の受影受動文のように、受動主語の立場から事態を捉え、他者の行為から受ける被影響感を表す(つまり文字通り「受身」を表す)ようなタイプはドイツ語の受動文には(少なくとも典型的な例としては)見られない、つまりドイツ語の Passiv は「受身」ではないという考えを示した。論拠としては以下の3点を指摘した。

第一の点は受動文の主語の有情性の違いである。日本語の降格受動文の主語は人でも物でもあり得るが、受影受動文の主語は基本的に人である。「大切なお金が泥棒に盗まれた」など物が主語の文も「潜在的受影者」である人を含意すると考えられる。一方、ドイツ語の受動文の主語は、文法書などの例文や小説などの実例調査から確認できるように、人に偏るということはない。さらに、日本語では固有の受動文の主語が有情物に限られるか否かという点がしばしば議論されてきたが、ドイツ語では受動文の主語の有情性がそもそも議論の対象になることはない。このように、主語の有情性から見ると、ドイツ語の受動文が積極的に「被影響」を表すという特徴を持つとは考えにくい。

第二の点は、日本語の受影受動文の二格動作主とドイツ語受動文の von-動作主の違いである。坪井(2002)などが指摘するように、日本語の受影受動文の二格動作主は単に主語から降格した行為者ではない。文脈から明らかな場合など省略されることもあるが、受動文の主語が感じる被影響の起因として、受動文の骨格形成に積極的に関わっていると考え

られる。一方、ドイツ語の受動文は一般に「動作主から目をそらした」表現であると特徴付けられており、実際に動作主が表示されない例が圧倒的に多い。動作主が表示されればその分だけ情報が加わるし、動作主が文意味上必要であったり、談話構造上重要な役割を担う場合もあるが、基本的に動作主は受動文の骨格形成には与らない。ドイツ語の受動文が能動文と比べて結合価が減少すると特徴付けられることがあるのもこのことを裏付けていると言える。

第三に、日本語の小説のドイツ語訳を見ると、日本語の受動文(XはYにVされる)が、ドイツ語では被動作者を目的語にした能動文($Y_{\text{nom}} + V + X_{\text{akk}}$)として訳されるケースが多いことに気が付く。とくに1人称主語の受動文の場合にこのような対応が多く見られる。村上春樹「ノルウェイの森」と Ursula Gräfe のドイツ語訳を調査した結果、日本語の1人称主語の受動文46例(表現が大きく異なり、態の対応を検討する対象から外れる例を除く)の独訳該当箇所のほぼ3分の2に当たる30例が、以下の例のように、日本語原文の受動主語「私」を対格目的語 mich にした能動表現となっていることが確認できた。(なお「ノルウェーの森」の2人称主語の受動文は半数(5/10)が、3人称人主語の受動文では3分の1(6/18)が能動表現であったが、これらについて本発表では考察していない。)

「本当は私あの学校に行きたくなかったの」と緑は言って小さく首を振った。「私はごく普通の公立の学校に入りたかったの。ごく普通の人が行くごく普通の学校に。そして楽しくのんびりと青春を過したかったの。でも親の見栄であそこに入れられちゃったのよ。ほら小学校のとき成績が良いとそういうことあるでしょ？先生がこの子の成績ならあそこ入れますよ、ってね。で、入れられちゃったわけ。(…)」

»Eigentlich wollte ich überhaupt nicht auf diese Schule gehen.« Midori schüttelte kurz den Kopf. »Ich wollte auf eine ganz normale staatliche Oberschule gehen. Eine normale Schule mit normalen Leuten. Wo ich fröhlich und sorglos hätte aufwachsen können. Aber aus Geltungsbedürfnis haben meine Eltern mich dahin geschickt. (認められたい欲求から両親は私をあそこへ行かせた) So kann's einem gehen, wenn man gut in der Grundschule ist. Die Lehrer haben gesagt, mit den Noten könnte sie doch die und die Schule besuchen. Also haben sie mich hier reingesteckt. (それで彼らは私をここに入れた) «

吉本ばなな「キッチン」の Wolfgang Schlecht によるドイツ語訳でも、「私」を主語とする受動文すべて(5例のみ、「私」を省略した例も含む)が mich を対格目的語とする能動文で訳されているなど、他の翻訳者によるドイツ語にもこの傾向は見て取れる。このような対応関係は、他者の行為によって影響を被ったという主観性が強く感じられる受動文の場合に顕著に見られる。von-動作主には二格動作主のような(主語が感じる被影響の起因

としての)「行為者性」,「働きかけ性」が欠けているので,ドイツ語の受動文では「起因-被影響」の関係が十分に表せない。むしろ「誰が誰をどうする」という捉え方の他動詞構文が適している。そのためにドイツ語では受動文が避けられ,能動文が使われたのだと考えられる。

一方「ノルウェーの森」の物主語受動文のドイツ語訳では能動表現は26.6% (17/64)に過ぎず,73.4% (47/64)が受動的表現(werden-受動文,述語的過去分詞,付加語過去分詞)であった。日本語の物主語の受動文は基本的に主語が被影響を感じるタイプではないので,ドイツ語でも受動的表現に馴染むのだと考えられる。

参考文献(本要旨で挙げたもののみ)

川村 大(2012)『ラール形述語文の研究』くろしお出版。

金水 敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『國語學』164集,1-14。

金水 敏(1993)「受動文の固有・非固有性について」近代語学会編『近代語研究 第9集』武蔵野書院,475-508。

益岡 隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版。

坪井 栄治郎(2002)「受影性と受身」西村義樹編『認知言語学Ⅰ:事象構造』東京大学出版会。